

令和 6 年 5 月 27 日現在

機関番号：32406
研究種目：基盤研究(C) (一般)
研究期間：2019～2023
課題番号：19K00919
研究課題名(和文) 英語多読における負荷、制限の効果検証

研究課題名(英文) Setting restriction on extensive reading

研究代表者

中西 貴行 (Nakanishi, Takayuki)

獨協大学・経済学部・教授

研究者番号：10406019

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：多読が教授法の一つとして多くの研究結果から確証を得ているが、基本的に教員は、学生に本を自由に選択させている。つまり、多くの現場で本のレベルに対するコントロールはされていないのが現状である。本研究の結果としては、パイロットで行ったNakanishi(2018)の結果と同様のものとなった。被験者は206名でグループを二つに分け、それぞれに多読に関する制限を設けたものと、制限のないグループでの比較を行った。結果、制限を設けたグループの方が全体的な冊数では、それほどの違いがないものの、総語数で勝っていた。より多く多読に取り組むには、制限を設けることも可能性の一つだと示唆された結果となった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究から、今後の多読研究に関して何が必要なかの示唆を得ることができた。まず、多読の実際の効果を検証できること、そして、多読研究において、異なる分析手法を英語教育の分野に広めることができるということでも研究の意義は大きいと考える。

さらにもう一步進め、多読の語数比較、負荷、制限がどのような影響を教育に与えるのかを把握できるという点も本研究の学術的意義と考える。多読が教授法の一つとして研究結果から確証を得ている中で、現状は学生に本を自由に選択させている。つまり、多くの現場で本のレベルに対するコントロールはされていない。この多読の根本に疑問を投じた研究であり、今後の研究につながるものとする。

研究成果の概要(英文)：Principles of extensive reading stipulates that instructors let students choose what they want to read. Thus, instructors do not exercise any control over the difficulty level of students' reading materials. This study is a continuation and follow-up of Nakanishi (2018) which examined whether any restriction set on student choice of reading materials causes different degrees of extensive reading outcome.

Two-hundred-six third-year Japanese university students participated in the four-year study. Each year, students were divided into two groups. The first group (free-reading group) was permitted to read easier books, whereas the second group (restricted-reading group) had to choose books of at least 1,000 words. The findings revealed that both groups read a similar number of books over the same period of time, however, the restricted-reading group read more words than the free-reading group which was tantamount to the results of Nakanishi (2018).

研究分野：英語教育

キーワード：英語教育 英語多読 extensive reading

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

英語のインプット量を増やすためにER(多読)が活用されてきた。英語のインプットを最大化することに加えて、ERは自分なりに読書を楽しむことだと主張する研究者もいる。Yamashita (2015)は次のように主張している。「ERとは読書を楽しむことである。読書を楽しんでこそ、人はそれ自体の報酬のために読書を続ける。研究によれば、楽しみは読者の意欲を高めるだけでなく、認知機能にも良い影響を与え、理解や学習を促進することが考えられる。これらすべてが、ひいては多読に貢献するのである。」(p. 173)

Day and Bamford (1998)は、学生の言語能力レベルに合ったリーディング教材を使用することを提案している。しかし、多くの場合、教員は学生が読みたい本を自由に選ばせ、読書レベルを管理しない。Day and Bamford (2002)に見られるように、書籍の選択はERの重要な部分であり、文献でも取り上げられている。書籍の選択に関する主な議論は、学生が読みたいものを選ぶというものであり、Nakanishi (2018)はまさにこの点を問題視している。つまり、本の自由な選択を制限することが大量の読書につながるかどうかは、調査する価値があるかもしれないということである。本研究は、ERに対する制限の効果を調査した予備的研究であるNakanishi (2018)の確認とフォローアップである。学生に自分で本の難易度を選ばせることが、読書量増加につながるかどうかは不明であった。本研究では、学生の読書教材の選択とその難易度に制限を設けることで、そのギャップを埋めようとした。その結果、学生が読書を楽しめば、読書量の増加につながる可能性が示唆された。

Takase(2010)は、英語のインプット不足が英語力向上の課題であると主張している。ERの情緒的側面(Takase, 2007, Yamashita, 2013)が研究されているのと同様に、第二言語習得における多くの実証的研究も、ERを教育的方法として用いることを支持している。さらに、ERの利点と管理について述べている研究者は数多い(Day & Bamford, 1998; Nakanishi & Ueda, 2011)。Nakanishi(2015)とJoen and Day(2016)もERの包括的なメタ分析を行い、ERの全体的な有益性を提示している。

2. 研究の目的

本研究の目的は、グループ間の参加者のERの結果の違いを調査することである。そこで、以下の2つの研究課題を提起した：

- RQ1. 読書に制限のないグループと制限のあるグループとの間で、ERの結果に違いはあるか？
- RQ2. TOEIC スコアの差は ER の成果に影響を与えるか？もしあるなら、どのように影響を与えているか。

3. 研究の方法

参加者

経済学を専攻する日本の大学3年生26人が、4年間の研究に参加した。参加した学生のグループは毎年異なっていた。それぞれ1年次42名、2年次60名、3年次47名、4年次57名である。授業は4月初めに始まり、7月末に終わり、1学期を通して14回行われた。TOEICの点数によって振り分けられた2つのクラスを対象とした。すべてのクラスがTOEICの点数で振り分けられたため、各クラスのレベルには差があった。例を挙げると、1年目はTOEIC520点から555点までの学生25人が第1グループ、第2グループはTOEICスコアが560点から825点までの学生17名で構成されていた。表1は、各グループのTOEICスコアの平均値と標準偏差(SD)を示している。参加者は全員、週に1回だけ英語の授業に出席した。この授業は、批判的な読解力と思考力を養うことに焦

点を当てた、内容重視のアカデミック・リーディングとライティングのクラスであった。2つのクラスとも同じ教員が同じように教えた。

MReader

MReaderは、教員がERクラスを管理できる無料のオンラインツールである。そして、学生が読んだ本の理解度をテストするクイズ機能を備えている。一定の正答率に達すれば合格となり、読んだ本としてカウントされる。したがって、MReaderで高得点を取るためには、学生は本を全部読まなければならない。また、一度合格ステータスを獲得すると、各学生のトップページにその本の表紙が表示されるため、学生たちは自分が何冊読んだかを瞬時に認識することができる。

手順

この研究では、TOEIC スコアによって分類された2つのクラスを利用し、自由読書グループと制限読書グループの2つに分類した。自由読書グループも制限読書グループも、毎週授業の最初に10分間、クラス内でERを行った。学生は学校の図書館から本を借りるか、教員が持参した本を借りることができた。それぞれの本には、その本に含まれる単語数を記したシールが貼られており、学生が本を選ぶ際の助けとなった。2つのグループの唯一の違いは、自由読書グループは易しい本から始めることになっていたのに対し、制限読書グループは1,000語以上の本を選ばなければならなかったことである。

表 1. Descriptive Statistics of the TOEIC scores for the two groups

	Groups	N	<i>M</i> (min, max)	<i>SD</i>	<i>SE</i>	<i>skewness</i>	<i>kurtosis</i>
1 st year	Free	25	540.20 (520, 555)	10.94	2.19	-0.55	-0.61
	Restricted	17	620.88 (560, 825)	74.12	17.98	1.79	2.73
2 nd year	Free	29	567.41 (530, 610)	23.97	4.45	-0.97	0.08
	Restricted	31	672.90 (610, 850)	65.21	11.71	0.92	1.24
3 rd year	Free	23	768.26 (700, 880)	47.66	9.94	0.31	0.77
	Restricted	24	665.00 (640, 695)	19.62	19.62	-1.47	0.00
4 th year	Free	29	762.41 (695, 930)	56.66	10.52	1.51	1.07
	Restricted	28	664.64 (645, 690)	13.87	2.62	-1.12	0.51

Note. Free = Free reading group. Restricted = Restricted reading group.

4 . 研究成果

本研究では、大学のEFLクラスにおいて、自由読書グループと制限読書グループの間に4年間にわたる違いがあるかどうかを調査した。上述のようにTOEICスコアの影響を考慮し、2年後にグループを変更し、同じ手順を経験させた。本研究の結果はNakanishi (2018)と一致しており、両グループは同じ期間に同程度の冊数の本を読んだが、制限読書グループは1,000語以上の本を選ぶという制限のため、自由読書グループよりも多くの単語を読んだ。以下の表2で紙面の関係上、2年間の結果を示した。

表 2. Group Comparison over four years

1st year

Groups	May		June		July		Total	
	Books	Words	Books	Words	Books	Words	Books	Words
Free (M)	14.82	19,135.06	6.94	10,386.06	2.18	2,902.53	24.00	32,423.65
(SD)	7.48	8,841.50	4.80	4,839.06	2.40	3,282.04	10.40	6,739.84
Restricted (M)	16.59	34,650.29	4.76	10,345.94	4.18	9,096.24	25.53	54,092.47
(SD)	7.61	21,529.42	3.23	8,245.82	2.81	6,257.10	6.16	26,830.74

2nd year

Groups	May		June		July		Total	
	Books	Words	Books	Words	Books	Words	Books	Words
Free (M)	12.93	15,398.39	8.96	12,364.64	4.61	6,042.21	26.50	33,805.25
(SD)	6.64	10,426.44	5.13	8,648.89	3.14	4,742.74	4.97	7,206.37
Restricted (M)	14.07	28,670.19	5.00	13,233.15	4.44	8,308.15	23.52	50,211.48
(SD)	5.95	20,718.90	3.51	21,177.96	4.08	7,310.62	5.03	27,536.90

考慮すべき点として挙げておかなければならないのは、学生は最初の2年間は物理的な本しか読まなかったが、パンデミックのため、3年次からオンラインブックを導入せざるを得なくなったことである。オンラインブックの効果は無視できないが、それが具体的に何を意味するのかについては手がかりがない。また、学生がMReaderを通じて、実際の物理的な本を読んだのか、オンライン読書をしているかどうかを知る術もない。したがって、3年次から、学生は物理的な本とオンラインブックを混ぜて読むことになった。さらに、オンライン教育やオンライン読書は、学生の精神状態にさまざまな影響を与えたかもしれないという点も付け加えておく。

オンライン教育の影響はそれだけにとどまらなかった。TOEICをオンラインで受験するように

なったことで、受験スタイルが変化したのである。表1からもわかるように、TOEICをオンラインで受験開始した3年目から、両グループのTOEICスコアは急激に上昇した。2年目の高得点グループの平均スコアは672.9点であったが、3年目には768.2点と約100点高くなった。これは2年目も同様で、2年目は567.4点、3年目は665.0点であった。

自由読書グループと制限読書グループの比較から、最初の2年間と最後の2年間の顕著な違いが明らかになった。最初の2年間の最終的な読書量の差は約15,000語である。逆に、最後の2年間の差は小さく、約4,000語であった。これは簡単に手に入るオンラインブックに由来するものと考えられる。図書館にある本は実際に行って選ばなければならないのに対し、オンラインブックはいつでもどこでも利用できる。あるいは、Nakanishi (2018)が、TOEIC上位層はより難しい本から始めることに問題がないように見えると論じているように、習熟度が高い人は、簡単な本から始める必要はないということを示唆しているのかもしれない。多読の原則では、学生は易しい本から始めるとされているが、本研究の結果は、習熟度の高い学生に長い本を読ませることで、より多くの本を読むようになり、その結果、読書目標に到達しやすくなる可能性を指摘している。結局のところ、ボトムアップの読書プロセスの自動性を高めることができるのは、読むテキストの量かもしれないので、読む本の数は教育学的には無関係かもしれない。2,000語の本を1冊読むこともできるし、100語の本を20冊読むこともできる。習熟度の高い学生は、2,000語の本の方がより深い内容を楽しめるかもしれない。ある程度の英語力を持つ大学生にとって、本は知的好奇心を刺激するものである必要があるという点で、Nakanishi (2018)と同意見である。

参考文献

- Day, R. R., & Bamford, J. (1998). *Extensive reading in the second language classroom*. Cambridge, England: Cambridge University Press.
- Day, R. R., & Bamford, J. (2002). Top ten principles for teaching extensive reading. *Reading in a Foreign Language, 14*, 136-141.
- Jeon, E.-Y., and Day, R. R. (2016). The effectiveness of ER on reading proficiency: a meta-analysis. *Read. Foreign Lang.* 28, 246–265.
- Nakanishi, T., & Ueda, A. (2011). Extensive reading and the effect of shadowing. *Reading in a Foreign Language, 23*(1), 1-16.
- Nakanishi, T. (2015). A meta-analysis of extensive reading research. *TESOL Quarterly, 49*, 6–37. doi: 10.1002/tesq.157
- Nakanishi, T. (2018). Setting restriction on extensive reading: A preliminary short-term investigation. *The Language Teacher, (42)*6, 3-8.
- Takase, A. (2007). Japanese high school students' motivation for extensive L2 reading. *Reading in a Foreign Language, 19*, 1-18
- Takase, A. (2010). *Eigo tadoku tacho shido manyuaru (Instruction Manual for Extensive Reading and Listening in English)*. Tokyo: Taishukan.
- Yamashita, J. (2013). Effects of extensive reading on reading attitudes in a foreign language. *Reading in a Foreign Language, 25*, 248-263.
- Yamashita, J. (2015). In search of the nature of extensive reading in L2: Cognitive, affective, and pedagogical perspectives. *Reading in a Foreign Language, 27*, 168-181.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Takayuki Nakanishi
2. 発表標題 Controlling over the difficulty level of students reading materials
3. 学会等名 AsiaTEFL International Conference 2022 (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Takayuki Nakanishi
2. 発表標題 Setting restriction on extensive reading.
3. 学会等名 The Fifth World Congress on Extensive Reading (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------